

歌ことば

松浦 俊博

「生まれてくれて Welcome」中島みゆきの「誕生」の一フレーズである。娘が大学で合気道部に入った時、中島みゆきの歌が部の宴会を席卷していたそうで、「昨日は〇〇先輩が『最後の女神』を歌ったよ」と楽しそうに話してくれた。「お父さん、これ聞いてみる」と言ってカセットテープを貸してくれた。その中にこの歌があった。当時、私は四十代後半、母の介護のことで沈んだ気分が過ぎることが多かった。そんな時に、この歌を聞いて心を揺さぶられる思いがした。それから十五年あまりは、中島みゆきの歌に心地よく浸っていた。彼女の手作りの歌芝居「夜会」にも毎年のように足を運んだ。

彼女は教員資格を持つ才女で、作詞・作曲・歌手・芝居作りと何でもできる天才だ。最初の歌集の緒言に作詞の動機について書いている。「これらの詞は、すでに私のものではない。読まれた途端に読み手の解釈にとって代わられるから」。詞の信憑性のなさへの疑心と信心が、彼女に詞を書かせるようだ。自分の言葉が周りの人に正確に伝わらないことは「書こう会」でいつも経験する。

彼女の歌には人を元気づけるものが多い。「君の笑顔には不思議な力があると、君だけが知らない 気づいていない」。こんな可愛い詞は、きっとすべての女性を元気づけるだろう。

仕事を応援してくれる歌もある。「フロンティア フロンティア、地平をみつけるために、誰にも守られず 誰にも祀られず、淋しさも優しさも ゆく手を塞げない」。こんな簡単な言葉なのに、歯を食いしばって新分野を切り開くことに大きな励ましをくれる詞である。有名な「つばめよ高い空から教えてよ 地上の星を」も自分が掛け替えのない存在だと思わせてくれる。

彼岸へ旅立つ時にはどんな歌が耳の奥に聞こえているのだろうか。「おまえとわたしは たとえば二隻の舟、暗い海を渡ってゆく ひとつひとつの舟、互いの姿は波に隔てられても、同じ歌を歌いながらゆく 二隻の舟」。妻の優しい笑顔に見送られる夢を見る。